

サビエル生誕五百年



巡礼の道

142

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

山のモンの人たち

二人の青年が勢いよく餅をつくと日本にいるような錯覚に陥る。ラオス国境に近いタイ北部の山の村、ナムカ1の人たちが餅をついて歓迎してくれた。

あえて日本との違いを探せば、日本のうすは円形だが、モンのは舟型である。

タイ国王がモン族のためにロッジを五棟建てたナムカー村に三日間滞在したが、この間、二回も餅をついて

くれた。最初は歓迎のために白餅、二日目には土産のために赤米。丸く平たくして、バナナの葉に包んでくれた。

モンの人たちも日本と同じように正月や祝いに餅をつく。餅つきは日本人とモンの人たち以外にはない習慣という。日本人そっくりの顔つきの人が多く、赤ちゃんには蒙古斑（はん）が出る。餅つきを見ながらモンの人たちの祖先と日

本人の祖先は同じだったに違いないと改めて思った。

四十人余りが入れるロッジ下の集会所は壁は一面だけで、その壁の前に奥行き一メートル、幅二メートルのガラスのショーケースが二つあった。

中は三段になっていてランチョン・マットなど刺しゅう製品が並んでいる。村の婦人たちが作ったもので、ロッジを利用した人の土産品の陳列ケースだ。

日ごろの買い物は妻の担当だが、今回は病気で妻は参加できなかったの

早速、買い求めることにした。

一バーツは約三円。値段札を見ながら日本円ではどれくらいか計算したが、安い、とにかく安いので全部買い占めたくなる。

ケースの一番端に藍染めの反物があつた。モンの人たちが藍染めの文化を持っていることに驚く。

シャンティ山口の佐伯事務局長によると、今、タイ北部の山に住んでいるのはラオスから来た人がほとんどで、ラオスのモン族は藍染めが盛んだという。

値段を見ると五百バーツ、藍染め一反がわずかに千五百円だ。クロスステッチの刺しゅう製品は娘が関わるパレスチナの製品と

よく似ている。地域や民族によって多少は違うが、人間の営みは同じだと実感する。

モンの人たちは大変働き者で、農作業はもちろんだが、時間があれば家族の民族衣装や土産用の刺しゅう製品を作る。

赤ちゃんを背負った幼稚園の先生が売店の責任者のようで、たくさん買ったので、にっこり笑っててくれる坊主の人形をプレゼントしてくれた。

（元山口放送取締役ラジオ局長）



モンの人たちの餅つき



妻への土産の上着と藍染めの反物



ポシェット、人形にも刺しゅう